

「高学力」の大学生

「大学における教育の仕事」が、大学人からも重視されるようになってきた。これをテーマとした昨年の教科研大会の特別分科会は予想外の盛況となったし、そのすぐ後に開かれた日教組大学部教研の「授業の改善」をテーマとした特別分科会も盛況であったという。学生を教育するという仕事について大学の教師が集団的な討議をするようになってきたことは、重要な、よろこばしいことだが、同時に、そうせざるを得ない深刻な状況があることは、憂うべきことだし、ある意味では悲惨なことである。

ところで、「学生が勉強しないことにはハラがたつてたまらない」という昨年の教科研大会での私の発言が、一部の人の間で話題になっていろいろらしい。たとえば深井さん

は、「高校までの生活をそのまま大学にもちこんでくるかれらにたいしてハラをたててみるもはじまらないではないか」と書いてある(『教育』七八年一〇月号、一〇頁)。まちがったことをいったつもりはないが、おしかりももっともなので、不明を反省し、以下のことをつけ加えておきたい。

「学生が勉強しないと、大学の教師も勉強しなくなる、あるいは勉強しなくても済むようになる」という大学教師の一人である自分の弱さにたいするおそれといらだちが、私にはある。そうなることが政策的に企図されているのではないかとさえ感じられる。こういうことをふくめて発言したつもりだったし、むしろこっちに重点をおいたつもりだったが、この点は深井さんには伝わらなかつたらしい。

後日、深井さんの勤めている大学には私などに想像もつかないような学力の低い、学習意欲に欠けた学生が一杯いて、しかも試みても仕方がない状況があるので、と

教えてくれた人があった。深井さんが、だからしかつても仕方がないといわれたのだとすると、これは明らかに、私の発言の不尽ゅうぶんさが生んだ誤解である。

私がいだいている危機感やあせりは、「学力」の低い学生に接するなから生まれたものではないからである。私は、教師としての多少の経験と、高校教育についていくらか研究もしてみた理論的な根拠とに裏づけられて、「受験学力」をほんの僅かしか身につけないで進学してくる大学生については、正直のところ、深刻な危機感をいだいたり、あせりを感じたりしていない。「受験学力」をもたず、外国語の力などの基礎的な学力もひじょうに不じゅうぶんにしか身につけていない学生たちの学習意欲を喚起することは、「受験学力」のおぼけみtainな「高学力」の学生の場合よりは、ずっと容易だとおもうからである(深井さんの実践もそうらしい)。つまり、平凡な私のような教師にもできる程度の努力で学習意欲と探究心を触発すれば、教えもし教えられもする教師の醍醐味をあげよう

ことはできるのである。

「受験学力」が抜群の、しばしば国立大学などにみられるような学生となるとそうはいかない。じつをいうと、四年ほど前まではこういう「高学力」の学生たちとのつきあいがありなく、「高学力」の学生にたいする教育の仕事に従事したことがなかった私は、このところ、つきつぎに珍妙なことに出くわしてあわてふためている。

凝った構文の英文については感嘆するよきな日本語をつくる学生がいる。その学生が読書感想文となると、いわゆる低学力の学生たちのものとはくらべものにならないくらい平板で薄っぺらな内容の文章しか書けないだけでなく、しばしば前後の脈絡が定かでないかたり、意味不明の文章を平然と書くのである。低学力の学生の文章には、誤字・脱字・感字はいくらでもあるが内容がわからないことは滅多にない。以前、高校生の国語、数学、英語のそれぞれの成績の間の相関がゼロに近いという報告があったが(『日本の民間教育』第六号、一四五頁)、現実には接するまで、これほど深刻だとはおもわなかった。

レポートを書かせると、原稿用紙一〇枚

にわたって、一センテンスごとに全部改行している者がいたり、一センテンス終わつたあとを、ある場合は一字分あげ、ある場合には三字分も四字分もあげ、改行のときも、最初の一字分を下げたり下げなかったりしている者がいる。こういう場合は何が書いてあるか理解できないことが多い。呼んで尋ねてみると、前者の場合は、あるまじまりをつくることができているから、パラグラフにならないのだということがわかる。後者の場合は、どこでどう改行するか、何字分あげるかはまったく気分によるのだと聞かされて、あつげにとられてしまふ。

こういう学生は、たいてい「英語B」「数学II B」「世界史B」などの「受験学力」は抜群に高い(念のために言い添えれば、彼らも持っているのは英語や数学や世界史についての学力ではないのである)。必要な講義にはよく出席するし、うっかり、講義した内容を反覆させるような試験でもしようものなら、じつによくできる。しかし、講義に関係する書物を一冊も読まない学生はいくらでもいる。

紐が結べないことなどはいまや驚くに価しない。手持ちぶさたのために、指を、おしゃぶりしてしている学生がいて、注意したものかどうか、こちらがどきまぎしてしまふ。おしゃぶり」と「受験学力」が共存しているのである。こういう学生たちに研究意欲をかきたてられたり、教えられたりするとは、こちらが気づかないためか、あまり多くない。いや、能力主義教育政策が徹底するとこういう学生がふえるのだと教えられている。

こう書き連ねると、一部の事象をとりあげて否定面ばかり強調している、と教科研究の宇田川さんあたりにおしかりを受けそう。たしかに全部ではない。が、年ねんふえていることは疑い得ない。そして、身近で、卒論が書けないといつてノイローゼになる学生がでたり、卒論のできの悪さを悲観して自殺する者がでたりすると、教師たるもの、一部の事象だと済ますわけにはいかない。もちろん、しかるだけではどうにもならない。「大学における教育の仕事」が重要になってきたゆえんである。

(佐々木 享)